

# 本を選ぶ

NO.431 2021年(令和3年)4月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

- <ろん・ぼわん> Ruby -再-
- 大学教員ノート 第5回
- 「ざっさくプラス」無償公開から1年を経て
- 藤森建築の毛深い魅力満載の決定版作品集！
- 図書館を離れて (第52回)

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

## Ruby -再-

新聞の連載小説はめったに読まないが、池澤夏樹の『また会う日まで』は気になったのか気に入ったのか、途切れず読んでいる。戦前の海軍軍人を主人公とする話で、しかも水路部に所属する軍人だから技術畑の話題が多い。

ある日「機械式の時計では少しずつ誤差が溜まる。海では較正的手段がない」とあった。場面は、海軍軍人の他に大学の天文研究者や、関係機関の技術者などのチームが日本全国から集まって南太平洋の小さな島で皆既日食の観測をする準備の過程でのエピソード。この場合、各分野の測定機器に関わる「較正」の内容は印刷物などの校正作業とは違う。該当分野ごとに定められた国際的な基準(標準)に基づいた正確な観測値が得られているか、誤差があるとすればその範囲はどの程度か、などを評価するという意味になるのか。

印刷校正に戻ろう。校正作業の実際は、原稿と付き合わせて誤植を見つけたら、校正紙(初校ゲラ)に校正記号を使って朱筆で直しの指示を書き入れる。この印刷校正記号はJIS規格(JIS Z 8208:2007)にもなって標準化されている。前号でもふれたが、トルツメとかトルママ、トルイキ、四分アキなどの指示が代表的だ。

新聞朝刊には末尾近くに囲みの訂正記事が時折載る。例えば、「仮説を立てて検証する」「感心が薄かった」など。それぞれ「仮説を立てて検証する」「関心が薄かった」とすべきだったが、入力をミスしたらしい。校正(校閲)が甘かったのか、していなかったのか。新聞朝刊の文字量は紙面によって違うが、ほぼ12万字ほどで大変な量だ。それでも誤字・脱字が皆無で当たり前だとすれば、日本語の手本たる新聞としてはいささか恥ずかしい。内容の誤りも散見される。数値の取り違いなどは、聞き誤りました、などと理由を上げている。

訂正記事は多いときは連日となる週もある。そもそも記事原稿の日本語に問題がないか入稿前に点検するのは校正以前の問題だ。特にデジタル化されて以降は、この手の誤りが増えているように感じる。

活版印刷の時代は、新聞に限らず原稿作成に神経を使って完全原稿を心がけていた。活字の組み直しには時間と手間が掛かり、校正を重ねるたびにコストが上がるからだ。近年ワープロが当たり前になってからは、一応の原稿を上げてから、初校の段階でどんどん訂正の赤字を入れていく原稿訂正が普通になってしまった。

組版の誤植や組み方の体裁を主にただしていく校正に対して、校閲は内容的な誤りや疑いを指摘する作業で、高度な専門性が求められる。大新聞社とか大手の出版社には校閲部という名の専門部署が置かれているくらいだ。独立したプロの校正者やそうした人材を抱える専門会社もある。彼らはむしろ校閲者と呼ばれるべきだろう。(埜村 太郎)

# 大学教員ノート 第5回

## —孤独と怠けと—

石川 敬史

教務、学生、研究、入試、募集、情報、図書館、国際——いきなり冒頭から堅苦しい単語を並べてしまった。いわゆる大学内の会議体である。「大学ではどんな会議や委員会がある？」と聞かれれば、まずはひとまずこのような単語を口にするかもしれない。この他にも、全学の教授会や学科単位による学科会がある。

\*

2012年4月——大学の「教員」というフィールドに立たせていただいた。あれからもう9年が経つ。しかしながら、教育においても、研究においても、まだまだ日々修行の身であり続けている。いまだに試行錯誤しながら歩みを進めているので、本当にお恥ずかしい限りである。実は前職もいわゆる大学業界で仕事をしていた。都内の理工系大学にて図書館に勤務し、その後は学校法人の経営戦略部門へ異動になった。走りながら考えたこの時代の曲がりくねった轍は、また改めて別稿にて綴らせていただきたいと考えているが——大学の「職員」時代の拙い経験から、大学という組織体の仕組みはある程度理解しているつもりであった。ところが、「職員」からみる大学の景色と、「教員」からみる景色とは、全く異なるものであった。

\*

担任——個々の学生の性格、個性、価値観を対話の中からじっくりと見つめ、彼女たちの希望や思いを引き出し、同じ屋根の下で学びあうという信頼関係をつくる。前期と後期に彼女らと向きあう個別面談である。休学・退学希望者との面談や、出席回数不足学生への注意喚起に関係すると、場合によっては保護者とも向きあう。と……、文字で表現するのは実に簡単である。実際には個々の学生とつくる距離感がなかなか難しい。例年所属する学科では、1教員あたりおよそ30名の学生と向きあい続けている。

\*

学務——なんとも骨が折れる仕事であり、とに

かく座り心地が悪い。パソコンと向きあって地道なデータ入力や、個性豊かな学内外関係者との多方面の調整など、年間を通して緻密な作業が続く。教務、学生、募集入試、就職などの委員会には、各学科から一脚の椅子が用意されている。学科における各部門の事務局のような椅子である。現在進行形で私が座る椅子は教務であり、もう6年近く座り続けている。時間割編成、非常勤講師の手配、ゼミ配属希望調査、履修ガイダンスなど、いわゆる「カオス」になるときがしばしば。つじつま合わせに追われているので、早く違う色の椅子に座りたい……。

\*

センター長——図書館の副館長という、なんだかボンヤリとした立ち位置である。不肖の身である石川は、図書館学を専攻しているためか学長から指名されてしまった。かれこれ6年近く、ボンヤリと過ごしている。いわゆる「長」ではないので、大学執行部のしんどい会議体には加わずに済む(但し、予算ヒアリングという真剣勝負は除いて)。ボンヤリであるからこそ、他者からの干渉もない。これまでに副館長という自覚とマイペースで向きあってきた。図書館の改装、学生団体の組織化、連続ミニ講座の開講、学内移動図書館、選書ツアーなど——好きなことを自由にさせていただくことに感謝である。ちなみに館長は学長、副学長が歴任している。定期的な「ほうれんそう」を表面的な目的に、最近の大学業界の与太話をするのが楽しみである。

\*

司書課程——忘れてはいけないのが司書課程の主担当「教員」であることだ。但し、1人で考え、1人で決め、1で行うことが多いので(もちろん「ほうれんそう」はあるが)、他者からの干渉はなく、自由にデザインすることができる。高校生からの相談、履修ガイダンス、履修相談、時間割編成、非常勤講師との情報交換、就職相談、外部機関と

の連携など、いわゆる「入口」から「出口」まで裾野が広い。司書課程は全学部全学科で履修できるので、毎年1学年80～100名ほどの学生と教室で向きあう。

＊

卒業研究——4年生にとっては「就活」に次ぐ大きな大きな山である。情報保障、江戸期の出版、北斎漫画、神保町、本屋、古本、電子書籍、印刷、絵本、学校図書館、音声表現、有害図書、図書館建築、音楽療法、ノートテイクなど——ゼミ生は実に多彩なテーマを設定する。卒業論文を指導する身からすると、ゼミ生のテーマ設定はまさに「教員」への挑戦状でもある。ゼミ生と共に走りながら学び続けなければならない。

＊

授業——もちろん忘れてはいけない。この舞台に立つときは、いつも緊張する。情報処理演習、文化財研究、読書入門、和本の文化、入門ゼミナール、基礎演習、文芸文化ゼミなど——とりわけ司書課程以外の科目を抱えると、引き出しを探し回っているために、常に汗をかいてしまう。堂々とした振る舞いのできる博識の「教員」への憧れを抱く。授業に内包されていることのひとつに、束となって提出されるレポートや期末試験の採点——学生の個性を読み込むことは時間を忘れてしまうが、問題は定量的かつ合理的な点数の配分と評価である。この数値にも向きあわなくてはならない。

＊

「教員」からの景色を一方通行に刻んでしまった。つまらない文章である。自治体からお声がけいただく委員会や協議会、学会の理事や評議員、研修会や講演会講師への依頼、自分自身と向きあい続ける研究など——こちらの語りの方が有意義だったのかもしれない。実は、「教員」のフィールドに立たせていただいた際、当初は「21世紀教育創生部」という怪しい実態のない組織に配属された。英訳にも困った。所属する学生は不在であり、教員のみで組織で、会議も学生指導も少ない。いわゆる教養課程といったところであろうか。「道」が

ないため、藪をかき分けてコツコツ進んでいたところ、大学の改組にあわせて、現在所属する学科からお声がけいただいた。現在では、学科の末席を汚す「教員」として、文字では表現できない経験をさせていただいている。本当に有難い限りである。まさに「教員」からの景色を見せていただいている。

＊

一人の時間をリラックスして過ごそう、自分自身を癒そうという主張ではない。もっと自分自身に向き合うような時間、もしくは自分の技量を深めていく時間を持つ。

＊

表面的には単なるHow toと経験論に見えるが、孤独と向き合い、乗り越えていく古くて新しい「処方箋」が齋藤孝の『孤独のチカラ』（新潮社／2010）に描かれている。確かに誰しも自分と向きあい、自分を見つめることは、かなりつらいことである。しかし孤独であることとは、すなわち他者が差し伸べる手の温かさに敏感になり、一緒になってともに何かを成し遂げるためのエネルギーを蓄積する時間なのかもしれない。

＊

生活は元来「働くこと」と「暮らすこと」から成り立っている。しかも、「働くこと」と「暮らすこと」の関係は切りはなすことの出来ない輪になって、ぐるぐると回っている。

＊

かつて、「人の生涯」と「平和に暮らすこと」を射程に、勤勉すぎる日本人に対して「怠けることの『尊さ』」を呼びかけた『怠けのすすめ』（笹山京／農村漁村文化協会／1980）の一文である。「今」の「自分」のみを直視し、他者と比較する過度な競争の拡大に対して警鐘を鳴らしている。人間らしい生き方を学生に導くためには、会議を減らすための会議をつくるのではなく——「教員」も人間らしく生きることに向きあわなければならない。孤独に、そしてともに。

（いしかわ たかし：十文字学園女子大学）

# 「ざっさくプラス」無償公開から1年を経て

晴山 生菜

緊急事態宣言発令から1年が経ちました。弊社は、昨年4月1日から6月10日まで、運営する「雑誌記事索引データベース ざっさくプラス」を無償公開しました。あつという間の1年でした。

私たちは、詩人・評論家の、村松武司(1924-1993)の影響で出版を始め、1979年の創業以来、ハンセン病患者・回復者の作品集や、アジア・朝鮮関連の本を出版してきました。また「ざっさくプラス」というデータベースを、大学・公共図書館様向けに提供しています。今回はこの「ざっさくプラス」の無償公開について振り返り書きたいと思います。

「ざっさくプラス」では、「誰が」「どんな記事を」「どの雑誌の」「何年何月号に」発表したのかを調べることができます。NDL-ONLINE や CiNii Articles など、国営の記事索引データベースが主に戦後を対象とするのに比べ、「ざっさくプラス」は雑誌文化が始まった明治初期から現在までを検索対象とするところに、大きな特長があります。主な利用者は研究者・学生・文筆業、そして図書館員の方々です。

昨春、降って沸いたようなコロナ禍で、図書館が次々休館となりました。この時、私たちは迷いました。「ざっさくプラス」は個人向販売をしていませんから、契約図書館が閉まれば利用者の方々は「ざっさくプラス」を利用できません。その不便は想像に余りあります。我々は年間契約料を頂いているので、収入が急に目減りすることはありませんが、図書館休館で利用率が下がれば次年度の契約更新に大きな影響があり得ますし、何より利用不可になっては、日々データの追加し甲斐がありません。

五輪延期が発表された翌日の3月25日の朝、これからどうしたら……と考えながら駅の階段を登っているときふと「無償公開したらどうか」と思いつきました。電車に乗ってすぐ社内のグループチャットに投稿、SEや代理店にもメールで意見を求めました。それぞれすぐに返信があり、出社して打ち合わせを始める頃には、とにかく「やってみよう」と

いう方向性が固まりつつありました。

一方で、一度にアクセスが増えた場合のサーバーの負荷、契約機関の不公平感（「うちが買っているものを、無償公開するなんて」）による、次年度からの解約も懸念されました。しかし、幾人かからのユーザーへのヒアリングを重ね、大きな損失にはならないという確信を深めていきました。それからリリースを作って告知し、システム面の打合せをし、4月1日から無償公開を開始しました。発案から1週間でした。

結果、抗議の声は1件もなく、むしろ契約機関の方々には拡散や周知に積極的に協力してくださいました。このときの契約館の方々の厚意は本当に有難いものでした。また、無償公開を理由にした新年度の解約もなく、むしろ契約総数は微増しました。この時に強く感じたのは、サービスは常に利用者目線であればならない。そのことが最終的には利益につながる、ということです。仮に自分たちの目先の利益が損なわれるように見えても、利用者に資する選択をするべき時がある、と身を以て知りました。

話は逸れますが、最近の著作権法改正をめぐる、出版社側からの否定的意見を見るにつけても、やはり同じように思うのです。資料のインターネット送信に対する出版社のあり方については「著作権法改正は民業を圧迫するか？（ほんのひとこと：<https://www.shuppankyo.or.jp/post/honnohitokoto20210320>）」に書きました。忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

弊社は今後も、出版とデータベース両事業で「利用者目線」を貫きます。「ざっさくプラス」の新しい取り組みとしては、今年度から目次情報だけではなく、一次情報（本文の画像）の登載を開始し、さらにグレードアップさせていきます。

最後に、このデータベースの成り立ちは、創業者の藤巻修一が「ざっさくプラス物語」([http://www.libro-koseisha.co.jp/about/zassaku\\_story/](http://www.libro-koseisha.co.jp/about/zassaku_story/)) に書いておられますので、ぜひお読みになってみてください。(はれやま せいな：皓星社)



# 藤森建築の毛深い魅力満載の決定版作品集！

## — 『藤森照信作品集』 —

上山 亜紀

本書は、【建築史・路上観察・建築設計】と3つの活動を続ける藤森照信氏の建築作品集の集大成として、2020年6月にTOTO出版より発行しました。

TOTO出版と藤森氏との関係は長く、氏の建築デビュー作を建築家・隈研吾氏のテキストでまとめた『神長官守矢史料館 建築リフル001』\* (1992年)に始まり、TOTOギャラリー・間の個展にあわせて発行した『藤森照信 野蛮ギャルド建築』\* (1998年)、作品集『藤森照信建築』(2007年)、建築史家として古今東西の建築を訪れた知見に裏打ちされた「原・現代住宅再見」シリーズ\* (全3巻)、『藤森照信の特選美術館三昧』(2004年)などがあります。(\*品切)

衝撃の建築家デビュー作として知られる「神長官守矢史料館」(1991年)から、草が屋根を覆い尽くした風貌に、多くの人が魅了され、過日「日本芸術院賞」を受賞した近作「ラ コリーナ近江八幡 草屋根」(2015年)ほか、ほぼすべての作品を、藤森氏自身による書き下ろしの解説文とスケッチ、増田彰久氏の写真で網羅的に収録しています。

2006年に世界的建築の祭典「ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展」の日本館に出展して以来、海外での人気も一気に高まった藤森氏が、海外からの設計依頼に応えられるよう、強度の担保やスムーズな運搬、施工を実現するために編み出した「木造モノコック」についても、設計施工の手法とその作品を、まとめて紹介しています。

約2万字におよぶ書き下ろしの巻頭論文では、自身のこれまでのあゆみを振り返り、建築史・路上観察・建築設計の3つの活動の関係性が、立体的に語られています。また路上観察や縄文建築団を通じて藤森氏と深い交友関係をもつ、画家・作家の故・赤瀬川原平氏、イラストレーター南伸坊氏による独自で軽妙な藤森建築論も必読です。

そんな本書の裏コンセプトは、藤森建築のような「毛深さ」を感じられる作品集。藤森建築の魅力を濃密に表現し、できるだけ藤森氏の手の痕が感じられるように、これまで世に出ていない貴重な写真やスケッチを掘り起こしながら、グラフィック・デザイナーの赤崎正一氏と議論を重ねページ作りを行

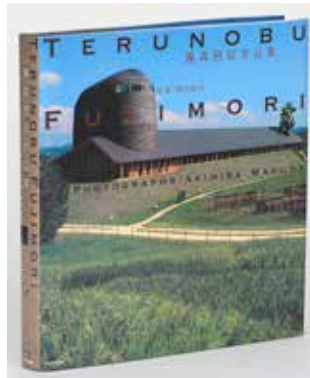
いました。編集部を目指す「毛深さ」に共感いただき、藤森氏の独特な素材表現が紙面からあふれ出るような構成が実現しています。

すべて手描きによる藤森氏のスタディや図面などは、氏の生まれ故郷にある茅野市美術館で大切に保管されています。この作品集に、ぜひ蔵出しのスケッチを掲載したいとお願いしたところ、特別に保管されている全資料を見せていただくことができました。時系列に作品が出来上

がっていく様が捉えられるスケッチや、アイデアの種などが膨大な数あり、それらは、方眼紙やスケッチブック、時には広告やFAXの裏紙などに描かれていました。スケッチのみならず、その建築で想定されている人物や動物のイラスト、さらに、そのタイミングでの気持ちを記した「これで決まり」「どう作るか？」などのコメントも書き残されており、藤森氏の設計当時の気持ちが垣間見られる大変貴重なものでした。また「ここにはこんなスケッチが新たに欲しい」という編集部のリクエストもふたつ返事で受けていただき、本書のための貴重な描き下ろしスケッチも数点、収録されています。巻末へは、手書きのあとがき原稿をそのまま掲載するなど、藤森氏の手の跡がお楽しみいただけるような工夫をこらしています。

「感覚的には誰にも分かりやすいのに、言葉で説明しにくい」と自ら評する藤森建築の魅力がギュッと凝縮された渾身の1冊です。

(かみやま あき：TOTO出版)



『藤森照信作品集』藤森照信(著)・増田彰久(写真) / 300×295mm / 上製 / 336頁 / 和英併記 / 定価13,200円(本体12,000円+税10%) TOTO出版刊

## 図書館を離れて (第52回)

— 「いい」と「よい」 —

並木 せつ子

前回まで「いく」と「ゆく」をとりあげたが、同様に「いい」と「よい」の使い分けについても疑問に思っていた。「それはよい考えだ」「枝を伐つてもよい」のような場合、「よい」は「いい」とも言い換えられる。今まで深く考えることもなく「いい」を使ってきたが、どちらが“正式”なのだろう。これも石井桃子の文章で改めて「よい」に気づき、どちらを使ったらよいか迷い始めた言葉なのだ。

『悩ましい国語辞典』(神永暁著 時事通信社)には、“意味に大きな違いはないが「よい」の方が古くから使われていて、『日本書紀』『万葉集』にも用例がある”という内容の記載がある。さらに《最近は「よい」よりも「いい」の方が優勢になりつつあるため、終止形と連体形に限っては「よい」を使うと文語的なニュアンスをもつと受け止められることが多くなった》とも。そもそも「いい」には終止形と連体形しかない。

『広辞苑(第五版)』と『岩波国語辞典(第六版)』を見ると、「いい」は《「よい」の転》《「よい」のくだけた言い方》という説明である。元になるのは「よい」の方らしい。ただし「いい塩梅」「いい加減」「いい気味」「いい面の皮」「いい迷惑」など、「いい」の方にしか載っていない言葉もある。『日本国語大辞典』には「よい気味」と「よい加減」もあるが、一般的には「いい」だろう。「いい加減」は「よい加減」の変化したもので、「いい」と「加減」をそれぞれ独立したアクセントで発音するときは「ちょうど良い程度」という意味、全体を平板に発音するときは「深く考えないで大雑把」という意味になる。

概して、「いい」に限定した言葉は、「自分だけいい子になる」の「いい子」のように、負の意味合いを持った使われ方をすることが多い。それに比べ「よい子」の場合はまさに「良い子」なのである。かつて幼年雑誌のタイトルになったのも『よいこ』(小学館1956-1995年)だったし、スーパーマーケットで「よい子はエスカレーターのそばで遊ばないようにしましょう」という放送を聞いたこと

もある。子守歌や童謡も「眠れよい子よ」(「モーツァルトの子守歌」堀内敬三訳詞)、「ねんねんころりよ…坊やはよい子だねんねしな」(作者不詳)、「よい子がすんでるよい町は…」(「歌の町」勝承夫作詞)など思いつく曲には「よい子」が多い。「七つの子」は「かわいい目をしたいい子だよ」(野口雨情作詞)だが、負の意味でないのは言うまでもない。

明治時代から昭和にかけての教科書では《すずをつけるがよい》《きまりのよい生活》など、「よい」に統一されているので、やはり「よい」が“正式”なのだろう。「いい」の最初の使用例は江戸時代中期だというのが、1900年頃(明治末)には既に児童向けの本に「いい」がかなり見受けられるようになる。「…好い聲で歌ひながら」(小川未明1910年)、「どんな物が好いの」(大江[巖谷]小波1904年)など、文中の「好い」には「いい」とルビがふられている。昭和に入ってから山村暮鳥『鐵の靴』、豊島與志雄『夢の卵』など「いい」の使用例は増えるが、「よい」も多くある。新実南吉は『おぢいさんのランプ』(1942年)の中で、《よいきっかけがない》《家の中にもせばいいいわけ》と両方使っていて、使い分けているようにも見える。『「いく」と「ゆく」』の中で紹介した『大人の読んだ小学国語読本』(1940年)の著者——学校教育で「ゆく」もきちんと教えるべきと力説した人——は、《「イキマシタ」でもよいのではあるが》と「よい」を使っている。

では『「いく」と「ゆく」』で紹介した女性の著者たちはどうだろうか。当初は「いく」「ゆく」と「いい」「よい」を同時にチェックしていこうと思ったのだが、2件を同時に見ようとすると、ますます見逃しが増えてしまうのであきらめた。また、「いく」「ゆく」のように人毎に顕著な違いが見出せないこともあって、二つの言葉の使い分けや、変化の流れを見極めるのは難しいと判断したのである。従って数人をさらりと見たに過ぎないのだが、以下のようなことを感じた。まず、ほとんどの人が「いい」「よい」を並行して使っている。例えば石井桃

子は《父は本ずきでわがりのよい…》と《理性的にわがりのいい父》のように、幸田文も《いい親》《よい家庭》のように、二つの言葉を一つの作品の中で併用している。壺井栄、岡部伊都子、向田邦子、平岩弓枝、角田光代なども同様。石牟礼道子は「よい」の使用率が際立って高い。「よい」には「良好」という意味の他に、「行ってよい」の場合のように「差しつかえない」という意味もあるが、室井佑月、宮部みゆき、藤原緋沙子は、前者に「よい」、後者に「いい」を用いる傾向が見られた。山口恵以子は《スタイルの良い美人》《「あんなに言わなくて良いのに」》《「カウンターで良い？」》の

ように、頻繁に「良い」を使う。「いい」も使っているので、「よい」と読むのだろうか。時代小説の書き手にもよく見られるタイプである。

こう見てくると「いい」と「よい」には生まれた年代も教育も関係していない。各人が文章の流れに最適な言葉を選んだ結果なのだろう。今回の収穫は“「潔い」の語源は「いさ・清し」で「いさぎ・良し」ではない。ゆえに「いさぎいい」は誤り、「いさぎ悪い」はもつての外”と遅まきながら知ったこと、副反応は「いい」「よい」という言葉に過敏に反応する癖がついたことだった。

(なみき せつこ：元図書館員)